

道徳的価値の自覚を深める道徳学習 ～考えを分類する話し合い活動を通して～

要約

21世紀は「知識基盤型社会」の時代であると言われている。それを活用する人間の側の問題から様々な影響も出てきており、児童の道徳性の発達を阻害している現象も多く指摘される。その背景には、社会全体のモラルの低下や家庭や地域社会での教育機能の低下、社会体験・自然体験の不足などの諸問題が挙げられている。そのような社会の変化に伴い、子どもたちの豊かな人間性や社会性を育む道徳教育の充実がますます重要になっている。本学級の子ども達は、1時間の道徳の学習の時間の中で、ねらいとする道徳的価値の大切さは理解しているが、それを将来の自己の生き方と結び付けるところまで深めていない子どもが多い。また、多様な考えがあると理解したり資料中の主人公の良さを自分と結び付けたり自分の良さや課題を考えたりできていない子どもが多いことが分かった。他人事として資料をとらえて、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえることが十分にはできていないため、心の外で理解している子どもが多いということが課題である。そこで、考えを分類する話し合い活動を仕組むことで、多様な考えの意味の違いを明確にし、それぞれの観点から多面的に自己を見つめることで、ねらいとする道徳的価値をより自分とのかかわりでとらえることができ、道徳的価値の自覚を深めることに繋がると考え、本副主題を設定した。そして、次のような具体的方策のもと、研究を進めていくことにした。

- (1) ねらいとする道徳的価値に分類する中心場面の設定の工夫【視点1】
- (2) ねらいとする道徳的価値に分類が見える板書の工夫【視点2】
- (3) ねらいとする道徳的価値に収束化させるための深める発問の工夫【視点3】

2つの実践の結果、次のような成果(○)と課題(●)を得た。

- 主人公がねらいとする道徳的価値を実現する場面で中心発問を設定したことは、主人公の言動にある道徳的価値について考えさせるのに有効であった。(視点1)
- 子ども達の考えを板書上で分類することは、一目で違いが見え、自分にはない考えを取り入れたり伸ばそうとしたりする子ども達の姿から、道徳的価値について多様な考えから多面的に自己を見つめさせる上で有効であった。(視点2)
- 子ども達の考えの予測から、資料によって分類の仕方を変えたことは、子ども達の思考を混乱させず、主人公の弱さや良さを受け入れることに繋がった。(視点2)
- 検証2では、ねらいとする道徳的価値について指導要領解説や資料から解釈したことは、学年の系統性が明確になり本時でねらいとする道徳的価値の焦点化に繋がった。(視点3)
- 検証1のように道徳的価値の解釈と資料が合っていないと、ねらいは達成できない。検証2のように指導要領解説と資料の両面から道徳的価値の解釈をすることを継続する。(視点3)
- 深める発問がねらいとする道徳的価値への収束に繋がっていなかった。一問一答式の発問になることが多く、子ども達に考えを深めさせる時間を十分に与えることができていなかった。シンプルな内容の発問の工夫が必要である。(視点3)
- 今回の検証では「主として自分自身に関すること」と「主として集団や社会のかかわりに関すること」で行った。他の視点でも有効かどうか検証が必要である。

キーワード：道徳的価値 自分とのかかわり 考えの分類 深める発問

1 主題・副主題設定の理由

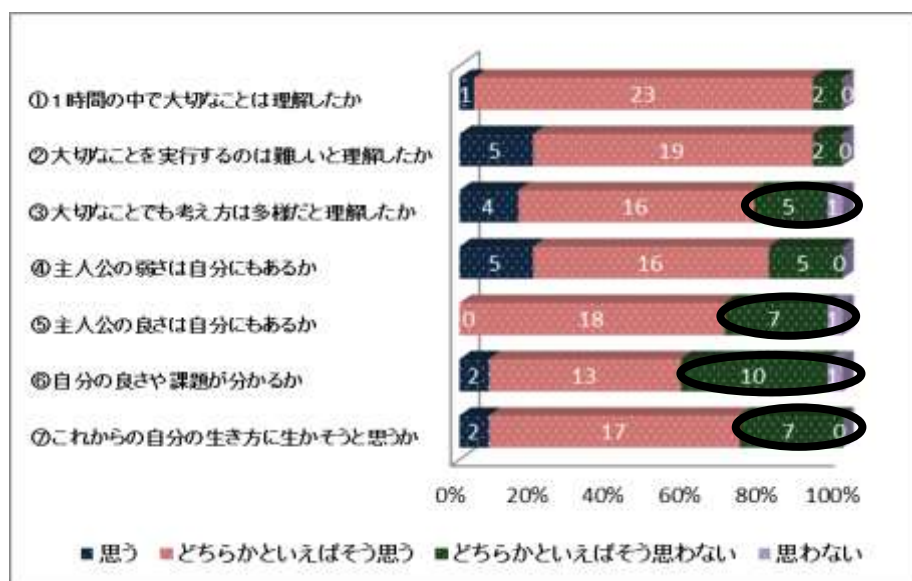
(1) 社会的要請・現代教育の動向から

21世紀は新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤型社会」の時代であると言われている。それを活用する人間の側の問題から様々な影響も出てきており、児童の道徳性の発達を阻害している現象も多く指摘される。その背景には、社会全体のモラルの低下や家庭や地域社会での教育機能の低下、社会体験・自然体験の不足などの諸問題が挙げられている。そのような社会の変化に伴い、子どもたちの豊かな人間性や社会性などを育む道徳教育の充実がますます重要になっている。そのため、子ども達が将来出会うであろう様々な場面、状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践できるように、道徳の時間の学習において、道徳的価値の自覚を深める道徳学習を行う必要があると考え、本主題を設定した。

(2) 教師の指導上の課題・子どもの実態から

道徳の学習の時間を振り返ると、資料の内容をなぞり、主人公の心情を考えるだけであった。つまり道徳の時間の特質である「道徳的価値の自覚を深める」を意識した授業づくりができていなかった。

また、【資料1】のアンケートの結果を見ると、本学級の子ども達は1時間の道徳の学習の時間の中で、ねらいとする道徳的価値の大切さは理解しているが、それを将来の自己の生き方と結び付けるところまで深めていない子どもが多い。(グラフ①・⑦) また、ねらいとする道徳的価値



【資料1 道徳の学習の時間に関するアンケート(事前)】

を視点として多様な考えがあると理解したり資料中の主人公の良さを自分と結び付けたり自分の良さや課題を考えたりできていない子どもが他項目に比べて多いことが分かった(グラフ③・⑤・⑥)。他人事として資料をとらえて、自分とのかかわりで道徳的価値をとらえることが十分にはできていないため、自分にとって本当に大切だと実感することなく、心の外で理解している子どもが多いということが課題である。その原因としては、資料の人物の心情を考えるまでのレベルに留まってしまったり、自分の考えを述べたり多様な考えを出し合ったりするだけで、考えの意味の違いを認め合うことが十分にできていなかったことが考えられる。そこで、考えを分類する話し合い活動を仕組むことで、多様な考えの意味の違いを明確にし、それぞれの視点から多面的に自己を見つめることで、ねらいとする道徳的価値をより自分とのかかわりでとらえることができ、道徳的価値の自覚を深めることに繋がると考え、本副主題を設定した。

2 主題・副主題の意味

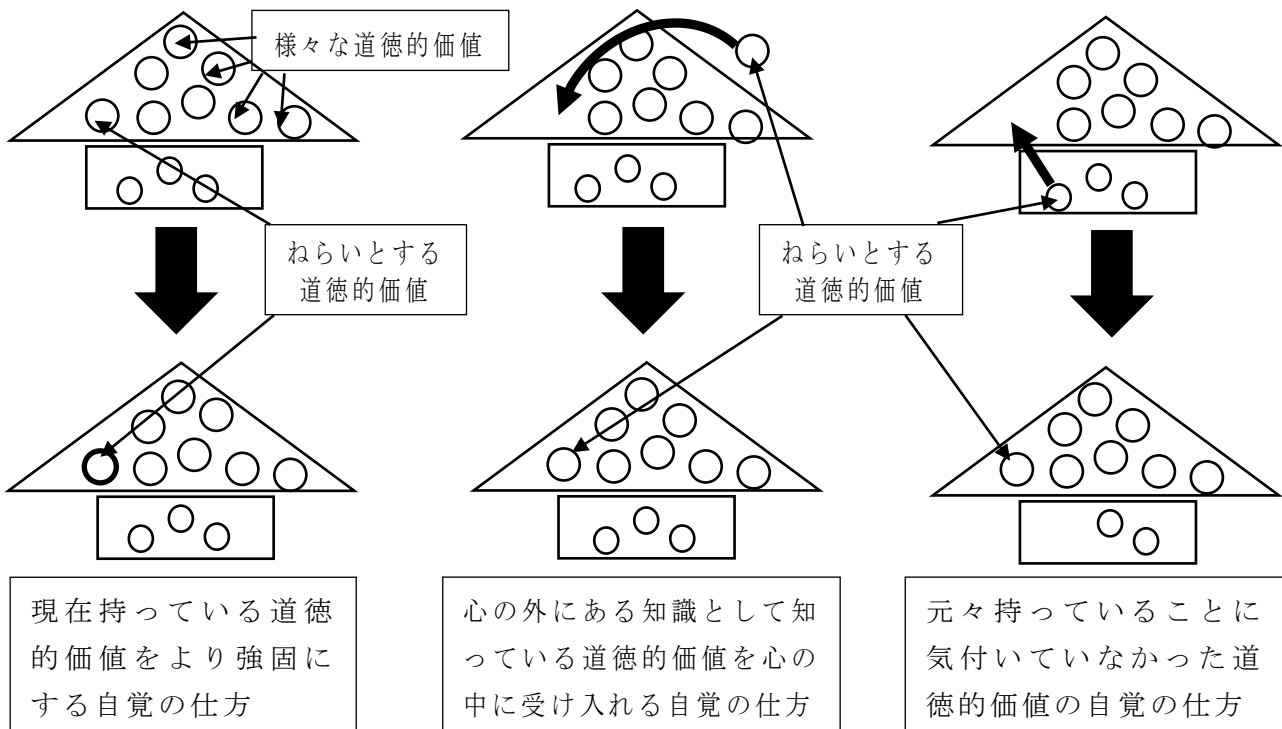
(1) 「道徳的価値の自覚を深める道徳学習」について

① 「道徳的価値」とは

子ども達が将来出会う様々な状況において、自分の力で最も適切な行為を導き出すための基準のはたらきをするものことである。子ども達が将来出会う様々な場面においては、いろいろな行為の可能性はある。いくつかある可能性の中で、人は自ら「本当によいことだ」と思う基準に従って最も適切な行為の選択をする。その時の基準のはたらきをするものである。

② 「道徳的価値の自覚を深める」とは

ねらいとする道徳的価値を自分とのかかわりでとらえることを通して、他人に強制されてではなく、自分にとって本当に大切なものだと心に受け止め、現在の自分がどのような状況にあるのかを明確に、より深く把握し、よりよく生きる上での思いや課題を明らかにすることである。現在持っている道徳的価値をより強固にしたり自分の外にある道徳的価値を取り入れたり無意識だった道徳的価値に気付いたりすることとも言える。



【資料2 道徳的価値の自覚を深めるとは】金井 肇「道徳授業の基本構造理論」より

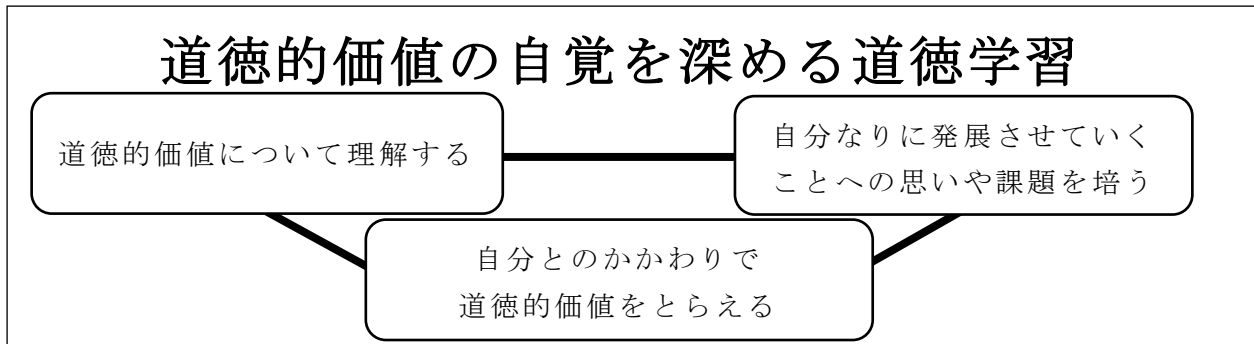
※ 三角形の中を心の中と考える。

③ 「道徳的価値の自覚を深める道徳学習」とは

次の3つでとらえている。①道徳的価値の大切さ、道徳的価値の実現の難しさ、道徳的価値についての考えの多様さについて理解すること（価値について理解する）、②資料や他者とのかかわりを通して道徳的価値を追求し、自分の中にある道徳的価値を把握すること（自分とのかかわりで価値をとらえる）、③道徳的価値についての自分の課題を明らかにし、「こんな自分になりたい」という具体的な姿を描くこと（価値を発展させていくことへの思いや課題を培う）。これらの条件を満たすことで、道徳的価値の自覚を深めることができる。と考える。

道徳的価値の自覚を深めた子どもの姿を以下のように考える。

- 道徳的価値を追求し、道徳的価値の実現の難しさ、道徳的価値についての考えの多様さを踏まえて道徳的価値の大切さを実感する子ども。(価値について理解する)
- 友達を感じ方、考え方と比較しながら内省し、自分がどのような状況にあるのかを客観的に把握する子ども。(自分とのかかわりで価値をとらえる)
- 道徳的価値から自分を見つめ直して課題を明らかにし、これからのよりよい自分の生き方を具現化しようとする実践意欲を高める子ども。(価値を発展させていくことへの思いや課題を培う)



【資料3 道徳的価値の自覚を深める道徳学習とは】

(2) 「考えを分類する話し合い活動」について

① 「考えを分類する」とは

資料の主人公の行為に至る考えを内容項目の4つの視点をもとにして分類し、それらの考えの意味の違いをはっきりさせることである。道徳的行為には、様々な道徳的価値が含まれている。それゆえに、子ども達の発言の道徳的な見方や考え方には違い

規範意識④ ・きまりだから	自分本位 ・自分の都合
自己の良心① ・すっきりしない	他者意識② ・周りにとって

が出て来る。出て来た考えを4つの視点をもとにして分類する。ただし、資料によって分類する項目、数は異なる。資料4は、一例である。

【資料4 分類の例】

② 「考えを分類する話し合い活動」とは

4つの視点をもとにして、中心場面での子ども達の判断基準となる考えを仲間分けしたものを板書に位置付け、それらの考えの意味の違いをはっきりさせた上で、深める発問をもとにした話し合い活動を通して、ねらいとする道徳的価値へと収束化することである。子ども達の考えをもとに比べ合うことで、考えの多様さや違いに気付く。そこで、自分はどの考えに近いか考えたり、他の考えの良さを実感したりして、自分に足りない判断基準である考えを明らかにし、より自分とのかかわりで多面的に道徳的価値をとらえる。そしてねらいとする道徳的価値に収束化する深める発問を通して、価値の大切さに気づき、現状認識し、課題を培うことができる。

3 研究の目標

子ども達の道徳的価値の自覚を深めるために、考えを分類する話し合い活動としての、中心場面の設定、板書の工夫、ねらいとする道徳的価値に収束化させる深める発問のあり方を究明していく。

4 研究の仮説

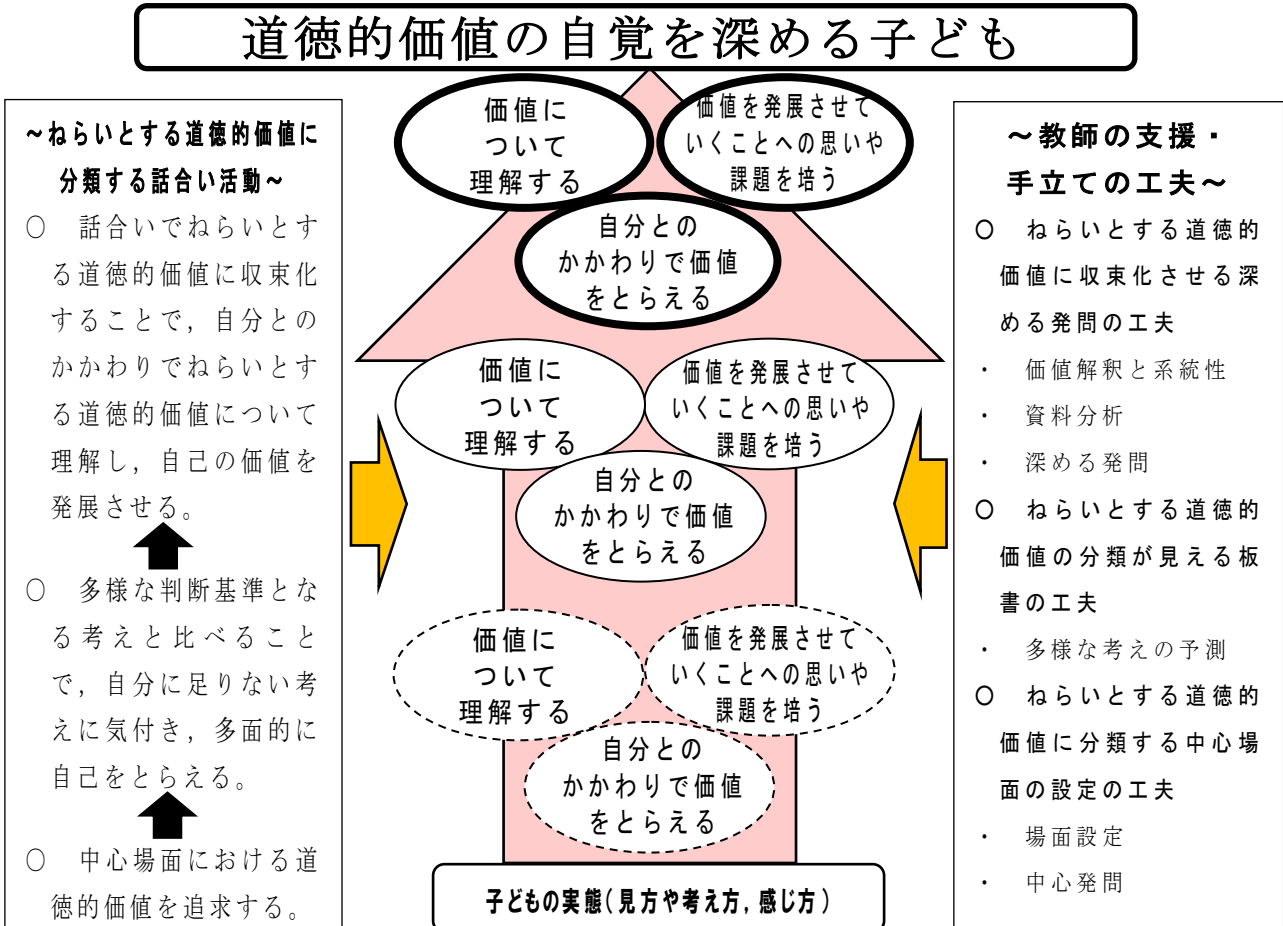
ねらいとする道徳的価値にかかわって、中心場面で考えの分類を行い、違いが見えるように板書に位置付け、意味の違いを明確にすることで、多様な判断基準である考えに気づき、道徳的価値について自分とのかかわりで考え、自分に足りない考えをとらえるだろう。そして収束化する深める発問を基にした話し合い活動を行うことで道徳的価値の自覚を深めることができるであろう。

5 仮説検証の内容と方法

本仮説に取り組むための具体的な方途として、以下の内容や方法を決め、研究に取り組むことにした。

- (1) ねらいとする道徳的価値に分類する中心場面の設定の工夫 【視点1】
 - 主人公がねらいとする道徳的価値を実現する場面の設定
 - 中心場面における中心発問の設定
- (2) ねらいとする道徳的価値に分類が見える板書の工夫 【視点2】
 - 子ども達の多様な考えの予測による分類
- (3) ねらいとする道徳的価値に収束化させる深める発問の工夫【視点3】
 - 収束化させる道徳的価値の解釈（道徳的価値の意味、学年の系統性の明確化）
 - 資料分析による道徳的価値の明確化
 - 深める発問の設定

6 研究の構想図



7 研究の実際

検証1（10月実施）

第6学年 主題名「誠実な生き方」 価値項目1－（4）誠実・明朗

資料名「見送られた二十球—松井秀喜」（文溪堂 6年生の道徳）

（1）ねらいとする道徳的価値に分類する中心場面の設定の工夫【視点1】

○ この資料における主人公である松井秀喜は、中学時代に敬遠を受け、ピッチャーをにらみつけながらバットを投げ捨て、その視線を外すことなく一塁方向へ向かっていった。そこでコーチに叱られ、大事なことを教わる。その中学時代を経て、高校時代の最後の夏の甲子園大会で5打席連続敬遠を受ける。この時に松井秀喜がとった行動は、「バットを静かに置き、誰にも文句を言わず、ひたすら前を向いて一塁ベースに走って行った」ことである。中学時代の行動からの大きな変化があり、この場面に「誠実」という道徳的価値を実現した姿があることから、中心場面に設定した。ここで、より自分とのかかわりでとらえさせ、多様な考えを引き出すために、子ども達には道徳的価値を実現する前までの文章を提示している。

○ 「高校時代最後の大会の最後の5打席目も敬遠され、一回もバットを振らせてもらえなかった松井選手はどんな気持ちで、どんな行動をとりますか。」と発問した。すると、①「悔しく、許せないから、にらんだりバットを投げ捨てたりする」②「ピッチャーである相手のことを考えて、我慢する」③「ルール違反ではなく、立派な作戦なので我慢する」④「怒るのは間違っていると中学時代に学んだので同じ過ちをしないため、自分を強くするためにも我慢する」と大きく4つの観点の考えが出た。②、③、④の考えの子どもも、①のような悔しい、許せないという感情があった上で

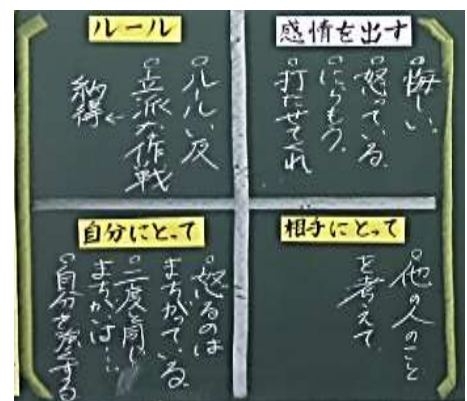


【資料5 中心発問に対する考えの発表】

であった。

（2）ねらいとする道徳的価値の分類が見える板書の工夫【視点2】

○ 相手を許せず、自分の気持ちが収まらずに「感情を出す」、相手ピッチャーに対して、思いやりの気持ちで許して黙って一塁へ向かう「相手にとって」、敬遠はルールで許されており、立派な作戦であるという中学時代のコーチの教えによる「ルール」、二度と同じ間違いはほしくないという強い意志や、正しいと思っていることをしようとする「自分にとって」の4つの観点による分類を考えた。実際の授業の中でも、子ども達の考えは



【資料6 分類した実際の板書】

【資料6】の4つの観点に分かれた。

（3）ねらいとする道徳的価値に収束化させるための深める発問の工夫【視点3】

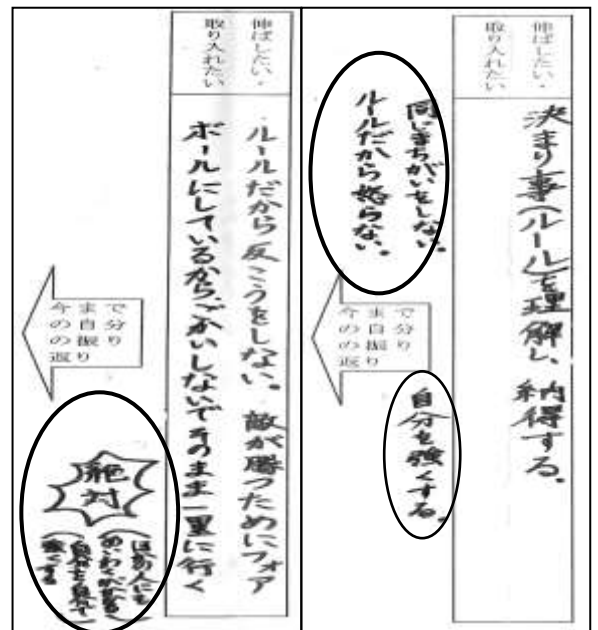
○ 誠実・明朗とは、常に相手の立場や気持ちを考えるうそのない真心が満ちていて、

その良心に素直に行動することによって、明るく清々しくなることである。

低学年でのキーワードが「素直」、中学年でのキーワードが「正直」、高学年のキーワードが「誠実」である。よいと思うことに他律的に従う「素直さ」に、自律的に感じ取ることが加わることで「正直さ」となる。「正直さ」に、他者が知らなくても自分をごまかしができないところまで高まり、自己を内省する働きが加わることで「誠実さ」となる。

- 本資料における道徳的価値は「誠実」である。最後の打席における松井秀喜の行動は、感情を出すとコーチに怒られるからではなく、大好きな野球のルールに納得したり、相手ピッチャーの立場や気持ちを考えたり、自分の中にある正しいと思ったことをしようとする強い意志があったりしたからであると考えられる。その行動は、中学時代の過ちを受け、「誠実」な心で行動していると解釈した。

- 「よりよく生きるために、自分が伸ばしたい、取り入れたいと思う考えはありますか。」と深める発問をした。ここでのねらいとする道徳的価値は4つの観点の内、「ルール」と「相手にとって」「自分にとって」における「誠実」である。子ども達それぞれが、大切であり自分に足りない考えを判断し、道徳的価値の大切さを理解し、それに対する思いや願いを培うことをねらいとした。中心発問による全体交流とグループ交流で、友達の考えに共感したり大切さを理解したりしながら、取り入れたい考えを学習プリントに付け加えていった。
【資料7】より○で囲んでいる部分がグループ交流で付け加えをした考えである。



【資料7 考えの取り入れ】

【考察】

- 資料の後半部分を削除し、共感的に中心場面を扱うことで、道徳的価値の実現の難しさを理解し、より自分とのかかわりで道徳的価値について考え、発言することができていた。(視点1)
- 考えを分類することで、違いが明確になり、自分に足りない判断基準である考えを学習プリントに付け加えすることができ、他者の考えから多面的に自己を見つめることができた。(視点2)
- 本資料からは私が解釈した「誠実」の道徳的価値をとらえにくく、それを子どもの言葉で私自身、表すことができていなかった。子ども達の多くが理解した大切なことは、「感情を抑えて我慢すること」になっていた。(視点3)
- 深める発問が、ねらいとする道徳的価値の良さを引き出すものになっていなかったため、4つの観点の内、個々が元々持っていなかった観点を、自分に足りないものとして取り入れたい考えとしてしまい、ねらいとする道徳的価値への収束化ができていなかった。(視点3)

検証2 (11月実施)

第6学年 主題名「進んで役割を果たす」 価値項目4-(3) 役割・責任
資料名「森の絵」(学研 みんなの道徳)

(1) ねらいとする道徳的価値に分類する中心場面の設定の工夫【視点1】

○ この資料における主人公であるえり子は、学習発表会でやることになった劇の役決めで、一番やりたかった役になれなかった。そのためか、どこか投げやりに係の仕事に取り組んでいた。積極的に役割を果たそうとする文男やめぐみの姿や言動がきっかけとなって、えり子も係の仕事に工夫をし出し、自分の絵でみんなを驚かせて劇を成功させたいという積極的に役割を果たそうとする姿になる。最初の行動からの大きな変化がある。この場面に「役割・責任」という道徳的価値を実現しようとする姿があることから、中心場面に設定した。

○ 「えり子は、どんなことを考えて投げやりに仕事することから、のびのびとポスターカラーを皿に溶き始めるようになったのですか。」と発問した。

【資料8】が子どもの考えである。

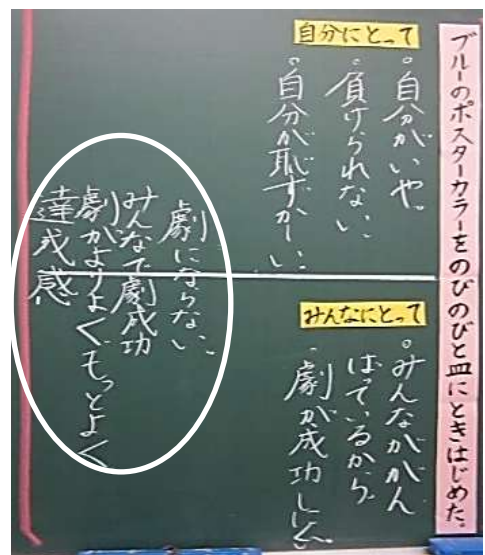
- ①「周り比べて自分が恥ずかしい、そんな自分が嫌だ」
- ②「みんなが頑張っているから迷惑はかけられない」
- ③「みんなで劇の成功を大きくするためにクラスの一員として」と大きく3つの観点の考えが出た。



① ② ③ 【資料8 子どもの考え】

(2) ねらいとする道徳的価値に分類が見える板書の工夫【視点2】

○ 頑張っている友達と自分を比べて、今の自分は恥ずかしい、そんな自分ではいたくないと考える「自分にとって」、みんなに申し訳ない、みんなで協力して成功させたい、成功を大きなものにしたいと考える「みんなにとって」の2つの観点による分類を考えた。後者の中でも、「集団の一員として、進んで役割を果たすことは、集団の全体の向上に繋がる」という集団全体の向上に繋がる考えを、ここでの「役割・責任」であるととらえている。「クラスの一員として劇の成功が大きく、よりよいものになるために」という考えである。この考えを、2つの観点の間に板書することで、強調させた。



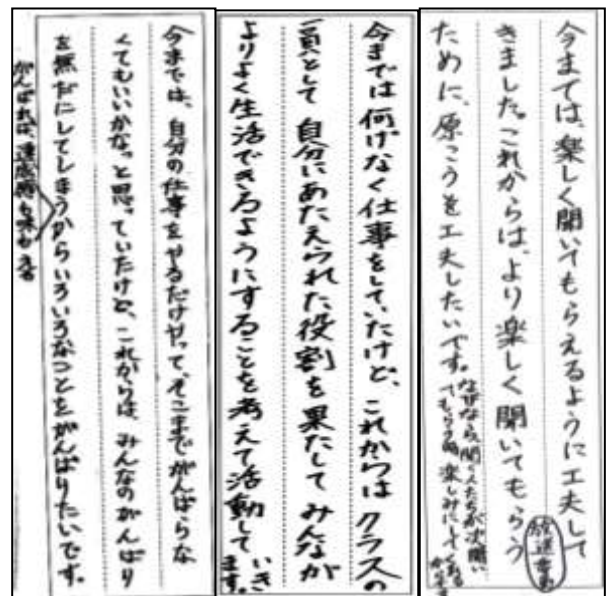
【資料9 分類した板書】

(【資料9】より)

(3) ねらいとする道徳的価値に収束化させる深める発問の工夫【視点3】

- 役割とは、社会や集団から与えられた役目や務めのことである。責任とは、個人が引き受けたことに対し、集団の目標を達成するために、損得感情関係なく力を尽くして社会や集団の期待に応えることである。しかし、役割の自覚の度合いによって行動が変わってくる。積極的に役割を果たすことは、集団の目標達成に不可欠であることに限らず、集団全体の向上に役立つ。役割を自覚し、責任を果たすことで集団の役に立つ喜びを感じ取り、集団への所属感を高めていくことができる。高学年からの価値項目であるが、このような態度は、低学年までも4—(2)の勤労・社会奉仕の価値項目で、「みんなのために働く」こと、中学年において「進んでみんなのために働く」ことに関する指導により育まれている。
- 本資料における道徳的価値は「役割・責任」である。希望の役になれなかった後のえり子の仕事ぶりは、投げやりであった。しかし、やっていないわけではなかった。対象人物の言動後のえり子の仕事ぶりは、のびのびと積極的な取り組みであった。本資料からは、劇の成功をよりよくしたいという思いから、役割を果たすだけでなく、積極的に果たそうとする心情を育てられると判断した。

- 「絵ももうすぐ出来上がりそうだし、えり子が頑張らなくても、劇は成功しそうじゃないですか。」「次、同じように希望しない役割になった時、周りが仕方なく仕事をしていたら、えり子は進んでしませんか。」と発問し、自分の頑張りや劇の成功をよりよくしたい、集団全体をよりよくしたいというえり子の気持ちに共感させることをねらいとした。【資料10】は子ども達の振り返りである。①周りを意識するようになった考え、②集団全体の向上に繋がる考え、③日常生活に結びつけた具体的な考えなどで振り返りをしていった。



【考察】

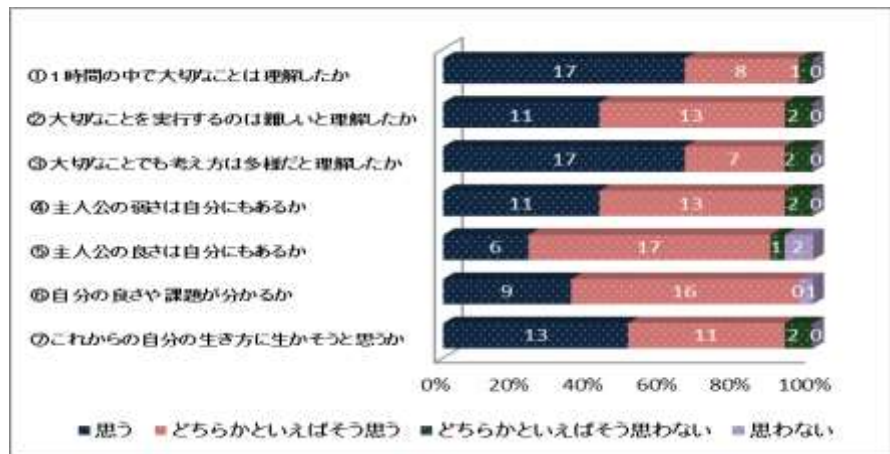
【資料10 振り返り】

- 私の解釈した「集団の一員として、進んで役割を果たすことは、集団の全体の向上に繋がる」道徳的価値は、本資料のえり子の投げやりな態度から積極的な態度へと変化していく様子からとらえやすいものであった。そのことが具体性のある振り返りにも繋がった。(視点1・3)
- 始めは1つの観点からの考えが多かったので、考えを「自分にとって」、「みんなにとって」の2つの観点で分類することは、進んで役割を果たすと自分にとってもみんなにとってもいいという考えに繋げることに有効だった。(視点2)
- 深める発問の内容が分かりにくく、2つも発問したので、子ども達は何を考えればよいのか分からず、混乱していた。内容的にも短い言葉で分かりやすい発問に絞り、1つにしてもっと吟味すべきであった。(視点3)

8 研究のまとめと今後の課題

(1) 全体考察

事前アンケートと同じアンケートをとると、【資料11】の結果が出た。課題であった③「大切なことでも考え方は多様だと理解したか」、⑤「主人公の良さは自分にもあるか」、⑥「自分の良さや課題が分かるか」、⑦「これからの自分の生き方に生かそうと思うか」のアンケート項目



【資料11 道徳の学習の時間に関するアンケート(事後)】

「どちらかといえばそう思わない」、「思わない」と答えた子どもの割合が減った。それと同時に、全体的に「思う」と答えた子どもの割合が大幅に増えたことが分かる。これらのことから、考えを分類する話し合い活動を仕組んだことで多様な考えから多面的に自己を見つめ、道徳的価値の自覚を深めることができた子どもが増えたと考える。

(2) 研究の成果と課題 (成果○・課題●)

- 主人公がねらいとする道徳的価値を実現する場面で中心発問を設定したことは、主人公の言動にある道徳的価値について考えさせるのに有効であった。(視点1)
- 子ども達の考えを板書上で分類することは、一目で違いが見え、自分にはない考えを取り入れたり伸ばそうとしたりする子ども達の姿から、道徳的価値について多様な考えから多面的に自己を見つめさせる上で有効であった。(視点2)
- 子ども達の考えの予測から、資料によって分類の仕方を変えたことは、子ども達の思考を混乱させず、主人公の弱さや良さを受け入れることに繋がった。(視点2)
- 検証2では、ねらいとする道徳的価値について指導要領解説や資料から解釈したことは、学年の系統性が明確になり、本時でねらいとする道徳的価値の焦点化に繋がった。(視点3)
- 検証1のように、道徳的価値の解釈と資料が合っていないと、ねらいは達成できない。検証2のように、指導要領解説と資料の両面から道徳的価値の解釈をすることを継続していく。(視点3)
- 深める発問がねらいとする道徳的価値への収束に繋がっていなかった。一問一答式の発問になることが多く、子ども達に考えを深めさせる時間を十分に与えることができていなかった。シンプルな内容の発問の工夫が必要である。(視点3)
- 今回の検証では「主として自分自身に関すること」と「主として集団や社会のかわりに関すること」で行った。他の視点でも有効かどうか検証が必要である。

<参考文献>

- ・ 文部科学省 平成20年 小学校指導要領解説道徳編 東洋館出版社
- ・ 赤堀 博之 平成25年 道徳授業で大切なこと 東洋館出版社
- ・ 金井 肇 平成 8年 道徳授業の基本構造理論 明治図書